毎日新聞 universalon
ユニバーサロン

ニュースクリッピング

今週の本棚：２００６年「この３冊」（その２）

◇中村達也（中央大教授・社会経済学）

『コルナイ・ヤーノシュ自伝』＝Ｋ・ヤーノシュ著／盛田常夫・訳
（日本評論社・４９３５円）

『国債の歴史』＝富田俊基・著
（東洋経済新報社・６３００円）

『脱デフレの歴史分析』＝安達誠司・著
（藤原書店・３７８０円）

前世紀を特徴づける壮大な実験だった社会主義。ハンガリー出身経済学者の苦渋に満ちた自伝が、自分史であることを遙（はる）かに超えて、社会主義の命運を跡づけている。

その彼が指摘した、ルーズな予算編成への傾斜は、実はこの日本でも、累積する財政赤字という形で、今、重くのしかかっている。その問題を、そもそも国債が

いかにして登場するに到ったかを解き明かしながら、歴史への関心を刺激する。

そして松方財政以降の、脱デフレを巡る政策レジーム間の拮抗（きっこう）を辿（たど）って、昨今の政策対応のあり方に楔（くさび）を打ち込む。